様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：基盤研究(C)（特設分野研究）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５ＫＴ００９２

研究課題名（和文）災害被災地における復興過程と高齢者の生活知の継承に関する研究

研究課題名（英文）A Survey of Recovery Processes in Disaster Areas: Focusing on the Transmission of the Knowledge and Experiences of the Elderly

研究代表者
福井　庸子（Yoko, Fukui）

大東文化大学・経営学部・講師

研究者番号：９０４０９６１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、複数の災害被災地の参与観察とインタビューを行い、文化的・社会的観点から復興の課題を分析することを目的とし、次の3点に着目した。①住民が望ましいとする生活イメージの把握、②高齢者の生活知を次世代に継承する際の工夫、③災害展示・災害遺構の現状と課題の把握である。①については、調査地の多くが被災経験をプラスに捉える努力をしながら生活の再生を目指していることが把握できた。②では、共同慣行を通じて、高齢者の経験を可視化することの有用性が確認された。③では、博物館の災害展示や災害遺構において、誰が、何を、何のために残すのかという問題が今なお取り残されていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we used participatory observation and interviews to examine the path to recovery for disaster areas in detail over time from the perspectives of their cultural and social backgrounds. We focused on the following three points: (1) What lifestyle do the residents imagine for themselves? (2) How do the elderly pass on their knowledge and experiences? (3) What are the problems with museum exhibitions concerning these disasters? We found that for (1), the residents in many disaster areas hope to regain their lives by accepting their past experiences, turning them into positives, and moving forward in their new lives; for (2), visualizing the experiences and knowledge of the elderly through regional cooperative works is vital for passing them on to the next generations, and for (3), many challenges remain in museum exhibitions concerning disasters, including who comes up with the concept, what will be shown, and to what purpose.

研究分野：教育学

キーワード：災害の記憶　災害復興　高齢者　高齢化　生活知　災害遺構　記憶の継承　災害展示

１．研究開始当初の背景

近年、日本各地で大規模な自然災害が発生しており復興のプロセスや減災、防災教育のあり方への注目が高まっている。同時に急速な高齢化社会の到来に伴い、過疎化の進む地域では、いかに持続可能な社会を展望するかが問題となっている。本研究はこうした近年の問題状況を鑑み、複数の災害被災地を取り上げ、復興、将来ビジョンの共有化のプロセスを比較検討、さらにこのプロセスにおいて高齢者の経験や生活知がどのような役割を果たすのかについて考察しようとした。ここで災害被災地を取り上げたのは、当該地域の大部分において、高齢化が進捗しており、人口の減少など地域の存続に向けた対策の必要性が問われていること、災害により生活環境が一変し、それまでの日常が覆されたことによって当該地域の生活知が改めて問題となっているためである。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の通りである。

(1)高齢者のみならず多様な世代の人々が災害以前の生活をどのように認識していたのかを把握する。これは、当該地域に存在してきた日々の暮らしを支え規制する様々な要素を把握すると同時に、住民が望む暮らしのイメージを描き出すためである。

(2)高齢者の経験や生活知が、異なる世代にどのように意識化、共有化されているのか、それがいかに地域の生活のなかに息づいているのかを理解する。その際に、地域内で執り行われる祭祀をはじめ多様な活動に着目し現地調査を実施する。

(3)災害の記憶継承に関する取り組み例を収集し整理する。地域の生活基盤を根底から揺るがした災害は地域の歴史からも見ても、生活再建、将来ビジョン構築の点においても重要な契機となりうる。災害をどのように記憶し継承しようとしているのか、特徴を整理するともに、そこで生じる課題についても検討する。

(4)(1)～(3)をあわせて記録化、比較検討することで、地域の復興にあたっての高齢者の経験や生活知の果たす役割や、各地域に共通する活動の特徴、課題を整理する。

３．研究の方法

本研究のスタート時点においての関心は高齢者の生活知が災害被災地の復旧、復興において、いかに意識化され反映されたかという点にあり、高齢者及び周辺の人々へのインタビュー調査を実施する予定であった。

しかし調査の過程において、高齢者の生活知がそのままの形で地域に反映されるわけではなく、異なる世代、行政や支援者なども含む異なる地域の人々や異なる災害体験者との接触や交流のなかで可視化、共有化され、形を変えながら残っていく様子が確認できた。よって、インタビューに加え、当該地域内での住民同士及び異なる地域の人々とのやり取りに注目し、多様な関係性のなかに調査者自身が身を置いて聞き取りする形式を多用した。

具体的な調査地は火山噴火のため全島避難を経験した東京都三宅島（2000 年）、宅地造成が始まり 2015 年 3 月に駅が再開され町づくりが本格化する宮城県女川町とその周辺集落、中越地震（2004 年）の被災地である新潟県小千谷市、福岡県西方沖地震（2007 年）の福岡県玄界島、長野県北部地震（2011 年）の長野県下水内郡栄村である。

上記以外にも災害記憶の継承のために建設された施設を見学し、「災害を展示すること」の意味に関する議論の検討を行った。主な調査場所は、中越メモリアル回廊と名付けられた新潟県中越地震のメモリアル拠点である 4 施設、3 公園（長岡震災アーカイブきおくみらい、やまこし復興交流館　おらたる、木籠メモリアルパーク、川口きずな館、妙見メモリアルパーク、おぢや震災ミュージアムそなえ館、震央メモリアルパーク）、新潟県柏崎市「市民活動センター中越沖地震メモリアル　まちから」、長野県下水内郡栄村復興記念館「絆」、大阪府吹田市国立民俗学博物館企画展示「津波を越えて生きる　大槌町の奮闘の記録」、宮城県気仙沼市リアス・アーク美術館「東日本大震災の記録と津波の災害史」、東松島市災害復興伝承館、仙台市せんだい 3.11 メモリアル交流館、気仙沼市唐桑半島ビジターセンター、岩手県宮古市浄土ヶ浜ビジターセンター、和歌山県有田郡広川町、稲むらの火の館（浜口梧稜記念館・津波防災教育センター）であり、展示の見学に加えて関係者からの聞き取りを実施した。また、災害遺構の保存に関する是非や意味の議論の動向についても調査を実施し、東日本大震災関係の被災地である宮城県仙台市立荒浜小学校とその一帯、宮城県名取市閖上地区、岩手県宮古市田老地区、阪神淡路大震災の被災地区である兵庫県神戸市新長田地区にて関係者からの聞き取りや見学者の動向に関しての情報を得た。上記を整理すると以下のようになる。

(1)当該地域の公的な資料や地域に保存されている文書等の解読、整理をした。これによって調査地域がいかなる特徴を持つ地域であるかを客観的に把握することが可能となった。

(2) 当該地域において住民同士の日常的なやり取りや行為、異なる地域の人々を巻き込んだ祭祀や田植え等の共同慣行を、参与観察によって記録した。これは、記録として残りにくい当該地域の生活知や社会関係を暮らしのなかから掬い上げ、理解するためである。

(3)災害遺構等、災害に関連する記憶やモノがいかに保存され活用されようとしているかを事例収集し整理した。既述したように災害は地域の未来を考えるうえで重要な意味を持つ。本研究では上記の調査地以外の災害被災地を含めて事例を収集し、それぞれの特徴を分析した。

(4)(1)～(3)を記録化し比較検証することによって、各調査地域の特徴的な点もしくは共通する点に関して知見を得ることを目的とした。

４．研究成果

調査の結果、(1)住民にとっての被災経験の受けとめ方、望ましいとする生活のイメージ、(2)高齢者の経験や生活知が次世代にいかに継承されているか、その際の工夫や有効な取り組み、(3)継承に際しての課題、(4)災害遺構の保存・災害の展示に関わる現状の把握と整理について知見が得られた。以下、概略を記す。

(1)住民の被災経験の受け止め方・望ましい生活のイメージ

本研究では当該地域において維持されてきた生活と、生活の再生、創造に向けての取り組みの理解に努めた。具体的には集落維持のためのさまざまな共同慣行に参加し、被災以前の暮らしを視野に入れながら被災後の生活の変化に着目し、住民がどのような生活の復興を望んでいるかを明らかにしようとした。本研究で取り上げた調査地の背景は多様であり、一概に一般化することはできないが、以下、いくつかの事例を挙げる。過去に自然被害を経験した地域では（東京都三宅島、長野県栄村小滝集落、福岡県玄界島）、過去の被災が必ずしもネガティブなものとして受け入れられていない傾向が見られた。三宅島では噴火に対するマイナスな発言を耳にすることはなく、噴火と噴火に伴う変化を受容する柔軟な姿勢が確認できた。小滝集落では近世における飢饉からの村の再建から学び、その事実にエンパワーメントされているという表の語りがある一方で、けっして表で語りたがらない住民の葛藤や確執があったことも把握された。それを踏まえた上での選択・決定を経ての、「望ましい」生活の再生・創造であることに第三者は留意する必要がある。玄界島の短期間かつ大規模な復興における住民の合意形成の過程は示唆に富むものであった。暮らしを支える諸要素を掬い上げ、当該地域の論理に沿って対応することの重要性が明らかになった。

いずれの調査地においても地域内での仕事の創出が重要な課題であり、地域の自律性が強く志向されていた。産物の販売路を拡大するにあたって、もしくは観光地として機能していくに際して、いかに外部の論理に飲み込まれずに地域の自律性を維持できるか、が問題となっていた。

(2)高齢者の経験や生活知を次世代に継承する際の工夫

・第一に祭祀の有用性が挙げられる。祭祀のなかに組み込まれた行為には当該地域において継承されてきた地域への思いが内包されている。多くの場合、祭祀での舞や演奏にはマニュアルも楽譜もなく、これを担う若い世代は舞や演奏の練習の場に継続的に参加することによってリズムや振る舞いを身体に叩き込む必要がある。この経緯で必然的に高齢者と若い世代は同じ空間に身を置くこととなり、祭祀を通して地域に受け継がれてきた振る舞いや価値観、地域の歴史についてインフォーマルに継承されていく。宮城県女川町では獅子振りに関わる語りが震災前の暮らしを想起する契機となっている。長野県栄村小滝集落においては練習の場に未就学児の頃から参加しており祭りのリズムが身体に刷り込まれていた。

・第二に集落の歴史や高齢者の経験が可視化されている点が挙げられる。長野県栄村小滝集落では集落内で起こった過去の出来事の多くが、生活のなかに可視化された状態で多数埋め込まれている。例えば集落内の神社には近世の旅人や集落の高齢者が若い頃に記した落書きなど多数が存在し、折に触れ、それが何であるかが住民同士、地域外の人間に対して語られる。重要なのは、これらの集落の歴史が博物館展示のように客観的な情報を提示するものではなく、極めてプライベートな個々人の経験に基づいた歴史である点である。可視化された資料を通して語られる経験は、高齢者自身の経験であり、高齢者以前の人々から語り継がれてきた経験である。

・第三は外部との継続的な接触である。被災を契機にインフラ整備や生活再建のためのボランティア、取材等、多数の外部の人々が地域に足を踏み入れている。また調査地の大部分において、人的つながりが一過性のものではなく継続的に維持されていた。それは、地域を客観視もしくは強みを発見する場として、地域活動を継続させる人的ネットワーク構築のためであったりと、多様である。人的ネットワークの維持の展開の仕方については災害被災地に限らず、現代社会におけるネットワーク形成のあり方を考えるうえでも示唆に富むことから、今後継続して調査していく予定である。

(3)高齢者の経験や生活知を次世代に継承する際の課題

・第一に挙げられるのは高齢者と若い世代の経験の相違から生じる現状認識の差異である。

東京都三宅島阿古地区は 1983 年の噴火で約 200 世帯の集落が溶岩に埋没し、その後、分散移住をした経験を持つ。高齢者の記憶にある生活は近所の生活音が身近に聞こえる音

に溢れたものであった。現在、三宅島の子ども数は増加傾向にあり、若い世代はその現実を実感しているものの、高齢者は分散移住や学校の統廃合によるバス通学のために少なくなった子どもの声から少子化が加速していると認識しがちであった。現状認識の差異は地域の将来を考える際に意識の齟齬をもたらすと想定される。

・次に挙げられるのは地域活動の担い手不足の問題である。宮城県女川町では伝統行事の担い手不足の問題を震災以前から抱えており、震災以降はボランティアのつながりを維持することで、祭礼等の継続を可能にしている。また新潟県小千谷市での語り部への聞き取りでは、継続的に語る場をもつことで、語りを形式化し、社会教育の場として機能している語りがある一方で、語り部の活動そのものが縮小していく現状もあることが確認できた。災害や戦争等、経験者は年を経るごとに減少していく。これをどう次の世代に継承していくかは重要な問題であろう。また、先述したように伝統行事の再生をめぐる新たなネットワーク形成は災害被災地に限らず多くの地域が直面する問題である。伝統の創造という観点からも今後も追跡調査をする必要がある。

(4)災害遺構の保存・災害の展示の現状把握と整理

東日本大震災から7年が経過し災害遺構の保存や災害展示に関する取り組みが蓄積しつつある。災害の受け止め方、復興意識またこれらの一連の出来事に関する評価は様々であり、そのため災害に関する経験や知の伝承のあり方も多様である。そのような状況において経験や記憶がどのようにして共有されているのか、どのように外部者・内部者に発信していくのか、またどのように継承されようとしているのか、本研究では近年の災害のみならず全国各地に所在する災害遺構やメモリアル、モニュメント、災害展示の見学し関係者への聞き取りを行った。

博物館や記念館等では、災害や津波等のメカニズムを学ぶ場、被災状況と復興を強調するケース、さらには観光としての新たな拠点として、など役割が複雑化している。現状を反映するかのように新たに設立された博物館や資料館は所管も多様であるばかりでなく、内容も多岐にわたっている。なかには客観的な事実の展示ではなく住民もしくは住民の持ち物に何が起こったか、被災直後の状況は人々の目にどう映ったのか、という極めて主観と言える部分に踏み込む展示も存在した（リアス・アーク美術館）。またリアス・アーク美術館では、逃げる、備えるということだけでなく、住民の自然観の変遷といった文化史に関する部分にも言及している。こうした数字上で表現しきれない脈々と受け継がれてきた暗黙的な意識こそが復旧・復興に際して重要な意味を持つと想定されるが、個々人の情緒や認識に関わる部分であり、どのように展示という形にまとめていくのかは今後の課題と言える。

こうした博物館や記念館では語り部を抱えている場合もあり（おぢや震災ミュージアムそなえ館）、博物館や記念館の存在によって継続的な語りの場、被災の個人的、地域限定の経験が継承される場が担保されている。

大規模災害の災害遺構をめぐる議論では保存及び撤去のいずれのケースについても文献調査にくわえて現地調査を実施した。災害遺構を残さないという選択をした阪神淡路大震災の被災地では近年になって災害の風化が問題となっている。一方でリアリティを強調する遺構に対する人々の複雑な感情や、抽象的な記念碑などを建ててメモリアルやモニュメントという形にしてしまう意味など、防災・復興・記憶の何を学び、伝え、かつ伝えられた（伝承された）ものをどのように理解し、さらに次世代に伝えるべきかを論じるための知見を得た。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

①福井　庸子、長野県下水内郡栄村小滝集落の災害復興の歴史的背景―、経営論集（大東文化大学経営学会）、査読無、35 号、2018、pp.105-112

②福井　庸子、災害及び避難生活が地域の生活と住民意識にもたらす変化－東京都三宅島を事例に―、経営論集（大東文化大学経営学会）、査読無、33 号、2017、pp.117-128

③中野　紀和、被災体験から記憶の共有へ―宮城県牡鹿郡女川町の若者たちの取り組み―、経営論集（大東文化大学経営学会）、査読無、33 号、2017、pp.93-102

④中野　紀和、過去の災害被災地に学ぶ　―福岡県西方沖地震の玄界島と長野県北部地震の栄村小滝集落 の復興過程―、法学研究（慶応義塾大学法学研究会）、査読無、第 90 巻第 1 号、2017、pp.283-305

⑤高桑　史子　過疎高齢化の島で生きる人々－甑島における限界集落からの脱却―、政経論集、第 84 巻第 3・4 号、2016、pp279-303

⑥高桑　史子、内戦後の漁業の現状ー開発政策と漁家－、アジ研ワールド・トレンド、査読無、No.243、2016、pp.22-25

〔学会発表〕（計 6 件）

①Kiwa Nakano ‘Efforts to pass on the memories of the disaster in Onagawa,Japan’ European Association for Japanese Studies International Conference 2017,2017

②中野　紀和、暮らしの中に災害復興のヒントを探る－福岡県西方沖地震の被災地・玄

界島に学ぶ―、シンポジウム「玄界島が伝えるもの―震災と地域の文化」／ 文化庁平成 28 年度地域の核となる美術館・歴史博物館支援事 業、博多湾岸《金印ロード》資源活用プロジェクト、2017

③Kiwa Nakano ‘After“Reconstruction” in Disaster Areas: Comparing Kotaki, in Sakae Village, Nagano Prefecture, and Genkai Island in Fukuoka Prefecture,’ Japan Studies Association of Canada,2016

④Kiwa Nakano ‘Recovery from the Disaster in Onagawa, Japan’ Lunchtime Workshop, The 2011 March 11th Disaster and Nuclear Power Plant Acciden,2016

⑤Kiwa Nakano ‘“Useless” Things Are Vital: Young People Trying to Recover Themselves after the Earthquake Disaster in Onagawa, Japan,’ The Anthropology of Asia, Talk Series,2016

⑥Kiwa Nakano ‘How Do People Reconstruct Former Disaster Areas?：The Case of Genkai Island and the Fukuoka Prefecture Western Offshore Earthquake,’ Lunchtime Lecture Series, Center for Japanese Research,2015

〔図書〕（計 6 件）

①高桑　史子 他、春風社、『コミュニティ事典』、2017、1168

②高桑　史子 他、新潟県立大学、『アジア地域の交流と統合』、2018、145

③中野　紀和 他、慶友社、『民俗的世界の位相－変容・生成・再編－』、2018、583

④中野　紀和 他、丸善出版、『大学生のための異文化・ 国際理解－差異と多様性への誘い－』、2017、212

⑤高桑　史子 他、アジア経済研究所、『内戦後のスリランカ経済－持続的発展のための諸条件－』、2015、313

⑥高桑　史子 他、明石書店、『アジア太平洋諸国の災害復興－人道支援・集落移転・防災と文化』、2015、222

〔その他〕

ホームページ等

①Kiwa Nakano ’After “Reconstruction” in Disaster Areas: Comparing Kotaki in Sakae Village, Nagano prefecture, and Genakai Island in Fukuoka Prefecture,’ Globalizing Japan：Issues in Language, Linguistics and Japanese Society (A Collection of Papers from Association of Canada (JSAC) 2016 Annual Meeting held at the University of British Columbia) Ed. David W.Edgington, pp.41-51 (http://buna.yorku.ca/jsac/jsac_web_pub/jsac2016_pub_global.pdf)

６．研究組織

(1)研究代表者

福井　庸子（FUKUI,Yoko）

大東文化大学経営学部経営学科・講師

研究者番号：90409615

(2)研究分担者

中野　紀和（NAKANO,Kiwa）

大東文化大学経営学部経営学科・教授

研究者番号：80320084

(3)連携研究者

高桑　史子（TAKAKUWA,Fumiko）

首都大学東京・人文科学研究科・客員教授

研究者番号：90289984